

令和元年6月21日現在

機関番号：13501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2018

課題番号：26870536

研究課題名（和文）家族の“関係性としての適応”を軸とした発達精神病理学的研究

研究課題名（英文）A psychopathological study focusing on Family relationship adaptation

研究代表者

川島 亜紀子（小林亜紀子）（KAWASHIMA, Akiko）

山梨大学・大学院総合研究部・准教授

研究者番号：20708333

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では子どもを含めた家族のウェルビーイングを、多面的、縦断的な研究デザインを用いて検証することを目的とし、共同養育と夫婦間コーピング、両親間関係と子どもの情動反応に焦点を当て、家族全体のウェルビーイングにどのように関連するのか、検証してきた。本研究の結果から、発達精神病理学的研究の一般的傾向と同様、関係性の否定的な側面のほうが、子どものメンタルヘルスを予測しつること、また両親間葛藤に子どもが関与することは子どものメンタルヘル스에ネガティブな影響を及ぼすとされてきたが、一概にネガティブな要素を持つのではなく、子どもの気質や両親の関係性によって関連が異なることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、夫婦の関係性における肯定的・否定的側面の両方に焦点を当てて、これを軸とした子どもを含む家族全体のウェルビーイングについて検証したことである。これによって、夫婦関係、母子関係、父子関係、といった二者関係にとどまらず、二者の関係性が家族内のその他の関係性へどのように関連するかを検証することができた。社会的意義としては、両親間葛藤に子どもが関与することが子どもの不適応に直結するのではなく、子どもの気質や両親関係の質によって調整される可能性が示されたことである。両親間の建設的葛藤と子どものコーピングが、家族の適応を促進する可能性を検証していくことの有用性を示すものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：The goal of this research was to examine the interacting family wellbeing, using multi-informant longitudinal design. Using coparenting quality, dyadic coping, and children's emotional reactivity during interparental conflicts as explaining variables, I examined how they were related to the family relationship adaptation and family members' mental health. One of the main results of this study was the negative relationship quality would predict children's outcome better, as in the same line with the developmental psychopathological studies. Although several studies had shown the negative relationship between children's involving in interparental conflicts and their negative outcomes, this study suggested that the relationship might be moderated by children's temperament and parental relationship quality.

研究分野：発達心理学

キーワード：夫婦 子ども 家族 発達精神病理学

1. 研究開始当初の背景

近年、夫婦関係の質と子どものメンタルヘルスとの関連について、我が国でも心理学的な研究が行われるようになってきているが(e.g. 川島, 2008), いずれも自記入式アンケート調査を用いた研究である。一方、欧米を中心として発展してきている発達精神病理学的研究では、こうした自記入式アンケート調査のみではなく、観察、実験、面接、生理学的指標や遺伝子解析を含めた多面的かつ複合的な研究(マルチレベルモデリング)が求められるようになってきており、特に発達精神病理学的研究から得られた知見を国際的に発信していくためには、こうした手法が必要不可欠なものとなりつつある。したがって、我が国の心理学的研究においても、多側面的な指標を用いて縦断的な調査を行っていくことがますます重要になってきている。

2. 研究の目的

夫婦関係の質と、子どもを含めた家族のウェルビーイングに関する研究は、我が国においても漸増しているが(e.g. 川島, 2008), 我が国における研究には、発達精神病理学的アプローチにおいて不可欠な、多側面的、かつ縦断的な研究デザインがまだ不足している。そこで、本研究では、我が国の家族関係研究において一般的な質問紙法に加え、観察法と生理学的指標を用いたアプローチを用いて、我が国ではまだほとんど検討されていない「共同養育 coparenting」という観点から、夫婦関係の質が子どもを含めた家族のウェルビーイングにどのように関連するのか、について検討することを目的とする。

3. 研究の方法

すでに研究協力者として登録されているサンプル(千葉大学 DADDY プロジェクト参加者, 119 家族)を対象として、縦断的調査を行った。質問紙調査では、共同養育と夫婦間サポート、性役割観と結婚観を含む、家族関係と個人のメンタルヘルス、属性変数などについて尋ねた。観察調査においては、三者の相互作用の評定と相互作用中の生理学的指標(顔面温度)を測定した。

4. 研究成果

(1) 共同養育(coparenting)

両親の夫婦関係の質(夫婦愛情関係と夫婦間の否定的なイベント(Relationship Attribution Measure の刺激文の体験頻度)と観察された両親の養育行動(Triadic Coordination Scales, Westerman, 1991)との関連を家庭観察に応じた22家庭に対して実施した。その結果、観察された、パートナーの子どもに対する行動への同意と非同意によって示される共同養育の質は、日常における夫婦愛情関係やパートナーによる否定的行動体験の頻度と関連していることが示唆された(表1)。具体的には、日ごろの夫婦関係の良さと、母親による父親の養育行動への同意の多さに関連がみられ、日ごろの夫婦間でのネガティブな体験は、父母のパートナーの養育行動への同意の少なさ、非同意の多さと関連していた(表1)。夫婦間の感情や情動が親子関係に持ち越されることをスピルオーバーと呼ぶが、幼児期における子どもの養育行動に対するスピルオーバーは先行研究では確認されなかった(川島, 2008)。しかしながら、本研究の結果、共同養育行動の質に対してはスピルオーバーがみられる可能性が示され、今後、夫婦間の肯定的・否定的な関係性がどのような道筋で幼児期の子どもに影響を及ぼしているのかを検討する際に、共同養育の質を考慮に入れることの有用性が示唆された。

(2) 夫婦間サポート(Dyadic Coping)

本研究では、夫婦間葛藤のみならず、個人の抱える葛藤を夫婦でどのように対処するかという夫婦間コーピングに着目し、夫婦間コーピングを測定する尺度(Dyadic Coping Inventory, Bodenmann, 2008)を原著者の許可を得て邦訳、検討し、子どもの情緒的安定性との関連を検討することを目的とした。

表 1 父親と母親によるパートナーの子どもに対する行動への同意行動と日常の夫婦関係指標との関連

	<i>Fa</i>		<i>Mo</i>	
	Agreement	Disagreement	Agreement	disagreement
	Marital intimacy			
Mo evaluation	.21	-.42+	.56*	-.12
Fa evaluation	.21	-.22	.24	-.10
	Negative marital events			
Mo evaluation	-.52*	.31	-.50*	.51*
Fa evaluation	-.59*	.33	-.30	.03

Note. $p^* < .05$, $p\ddagger < .10$, $n = 22$.

成人男女を対象としたオンライン調査の結果(男性121名、女性130名、平均年齢36.0(21-49)歳)、夫婦間コーピング尺度の信頼性係数は尺度全体で.93であり、一部下位尺度を除き、十分な内的整合性が確認された(下位尺度は、.51-.93、下位次元では.81-.95)。夫婦間コーピングは夫婦のメンタルヘルス(抑うつ状態)と関連していることが示され、特に否定的なコーピング(問題を抱えているときにパートナーがサポートの提供を嫌がったり、重要な問題だと扱わなかったりする等)と抑うつとの関連が夫・妻ともに一貫して確認された。

回答者のうち、小学生以下の子どもと同居している 122 名(男性 58 名,女性 64 名)を対象に、夫婦間葛藤時の子どもの情動反応に関する尺度 (Security in the Inter-parental Subsystem Scale (SIMS-PR, Davies et al, 2002, 28 項目, 5 件法)) への回答を求めた。WEB 調査の構造上、全項目に『分からない・そのような状況がない』という選択肢を設けたところ、当該尺度について全体の 75%以上にあたる 93 名が 1 度以上、『分からない・そのような状況がない』を選択した。1 項目以上で選択した対象者にその理由を尋ねる項目を用意した結果が図 1 である。「意見の不一致がない」、「話し合うことがない」とした人が 35%に及び、「子どものいないところで話す」を含めると 8 割が子どもの前でささいな言い争いや不機嫌な状態にさえなっていない、と回答していることが示される(本調査においては、夫婦間葛藤を「夫婦間の意見の食い違いについての話し合いや意見が合わなくていらしたり不機嫌になったりしているとき」と定義した)。この調査結果は、これまで実施してきた子どもを対象とした調査と食い違うものであり、我が国では、子どもの前で夫婦間葛藤は、他者には隠すべき「社会的に望ましくないもの」として捉えられているということを示唆する。

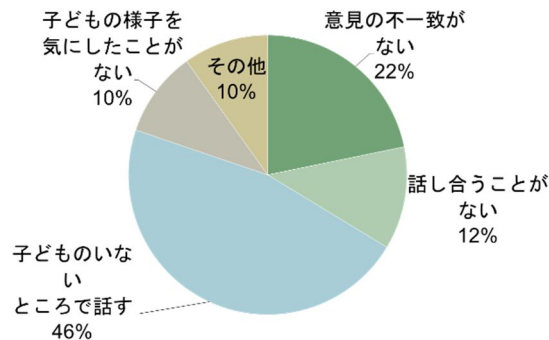


図 1. 夫婦間葛藤時の子どもの行動について「わからない・そのような状況がない」とした人の回答理由 (n=93)

(3) 夫婦関係と子どもの情動反応

父親の養育行動関連要因を検討する『DADDY プロジェクト(中澤, 2011)』に登録された、幼児を持つ家族 119 組(男児 56 名, 女児 60 名, 不明 3 名)を対象とした短期縦断調査データを用いて交差時差分析し、両親の夫婦間葛藤、両親の夫婦間葛藤時の子どもの情緒安定性、子どもの通常時の否定的感情の強さとの関連を検討した(図 2・3)。その結果、子どもの気質としての否定的感情の強さと両親間の葛藤、葛藤時の反応は評定者、評定時点によって異なることが示唆された。

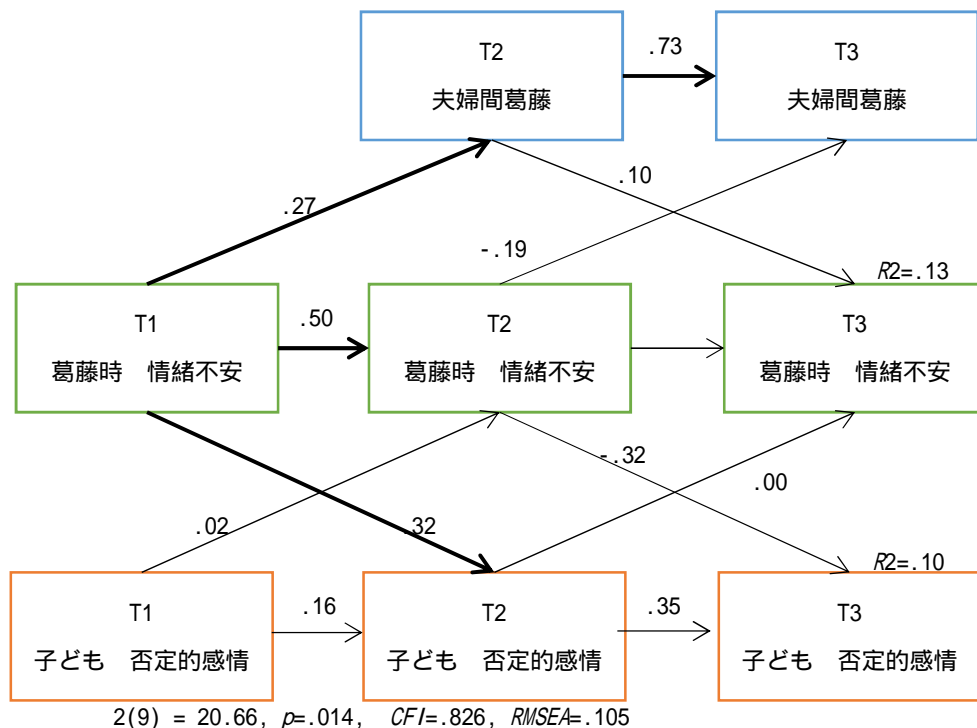
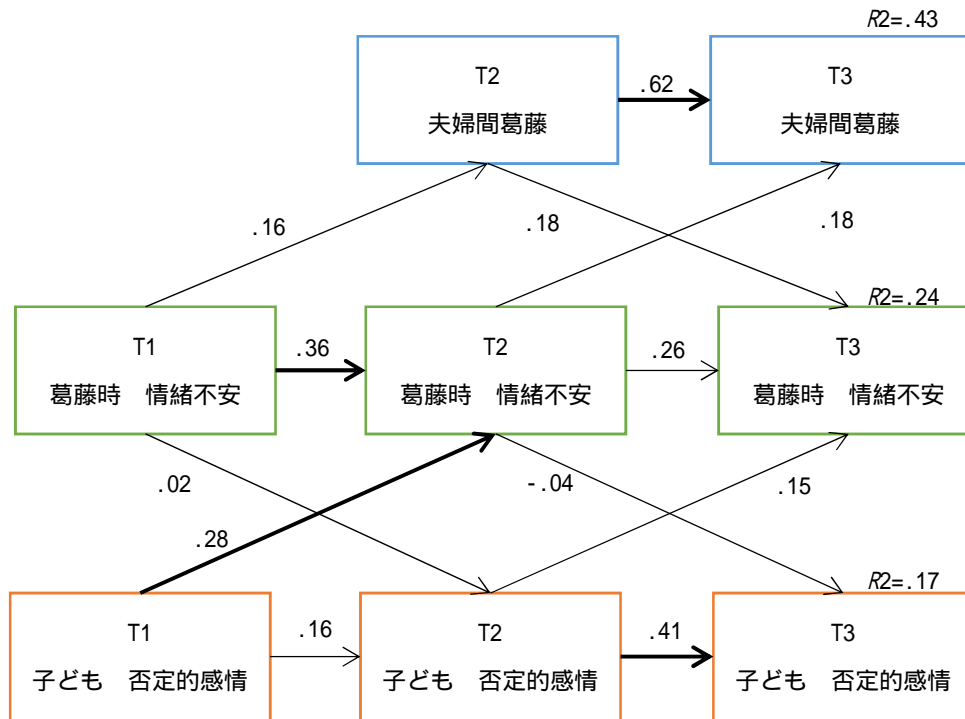


図 2. 母親評定による子どもの否定的感情と葛藤時の情動反応との関連 (有意なパスを太線で表す)



$\chi^2(9) = 19.55, p = .021, CFI = .641, RMSEA = .100$

図3. 父親評定による子どもの否定的感情と葛藤時の情動反応との関連 (太線は有意なパス)

子どもの問題行動について検証したところ、両親間葛藤に対する子どもの介入行動が、両親間葛藤時の子どもの情緒不安と関連する可能性が示されたため、探索的に子どもの問題行動(両親評定平均(SDQ))を従属変数、夫婦間葛藤時の子どもの介入行動および情緒不安をそれぞれ高低2群に分けた二つの独立変数を作成した分散分析を行った。その結果、介入行動の高低による有意な主効果、ならびに、情緒不安の有意傾向水準の主効果、そして、同じく有意傾向水準ではあるが交互作用を有する可能性が示唆された(順に、 $F(1, 63) = 4.44, p < .05, F(1, 63) = 3.72, 3.14, p < .10$, 図4)。

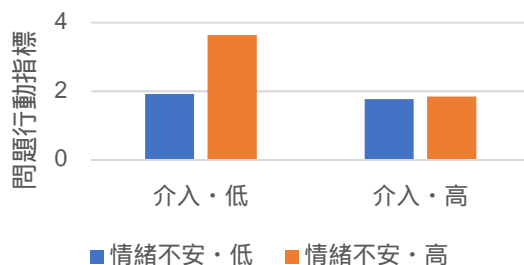


図4. 子どもによる両親間葛藤時の反応と子どもの問題行動指標(SDQ)との関連

本研究の結果からは、子どもが両親の夫婦間葛藤に介入することは子どもの問題行動の少なさと関連していたが、特に、葛藤時に情緒不安定になる子どもにおいて、その効果が強い可能性が示された。このことから、子どもの両親間葛藤への介入がもたらす影響は一様ではないことが確認され、我が国の実態に応じた家族関係としての適応を検討していく必要性が示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 5 件)

1. Kawashima, A., Hart, C. H., Nakazawa, J., Cheah, C. S. L. (2018) Contributions of Japanese Maternal and Paternal Parenting Practices to Children's Aggressive, sociable, and Anxious-withdrawn Behavior. The 25th International Society for the Study of Behavioural Development (ISSBD)
2. Kawashima, A., Nakazawa, J., & Hart, C. (2017) Paternal Involvement and Parenting Quality in Japan. Society for Research in Child Development (SRCDD)
3. Kawashima, A., Matsumoto, S., & Sugawara, M. (2015) Maintaining Quality of Life

and Mental Health through life-span development: The Effect of Childcare Quality in Japan. The 14th European Congress of Psychoogy (ECP)

4. 川島亜紀子, 中澤潤 (2015) 両親間葛藤と子どもの精神的健康: 子どもの情緒安定性に着目した縦断的検討 日本発達心理学会第 26 回大会
5. 川島亜紀子, 吉武尚美, 松本聡子, 菅原ますみ (2014) 夫婦コーピングの検討: 子どもの夫婦間葛藤時の情緒安定性に着目して 日本子ども学会学術集会第 11 回会議

〔図書〕(計 1 件)

1. Kawashima, A. & Kurosawa, T. (2016) Ch15. Dyadic Coping Among Japanese Couples, in Falconier, M. K., Randall, A. K., & Bodenmann, G. (eds) Couples Coing with Stress: A Cross-Cultural Perspective. Routledge.

〔産業財産権〕

出願状況 (計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年:
国内外の別:

取得状況 (計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名:

ローマ字氏名:

所属研究機関名:

部局名:

職名:

研究者番号 (8 桁):

(2) 研究協力者

研究協力者氏名: 中澤 潤

ローマ字氏名: NAKAZAWA, Jun

研究協力者氏名: 久留島 太郎

ローマ字氏名: KURUSHIMA, Taro

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。